

主 論 文 要 旨

形態論と統語論の相互作用 — 日本語と朝鮮語の対照言語学的研究 — 塚 本 秀 樹

〔第1章〕

本論文の目的は、日本語と朝鮮語において形態論と統語論がいかにかわり合っているのか、ということをも、対照言語学からのアプローチで解明することである。その解明の切り口として、具体的には次のことを行う。第一に、日本語と朝鮮語における諸言語現象を取り上げて考察し、それらに関する両言語間の類似点と相違点を明らかにする。第二に、そうすることによって明らかにされた両言語間の相違は、何を意味し、またどのように捉えるべきであるのか、ということについて論ずる。

〔第2章〕

1993年以前を振り返り、その時点において日本語と朝鮮語の対照言語学的研究が抱える問題点や課題を指摘した上で、それらを解決するためにはどうすべきか、ということについて論ずるとともに、同研究の今後を展望した。さらに、1994年以降、近年の状況についても述べた。なお、本論文は、その指摘された特に方法論・方向性に関する問題点や課題を解決するための答えを、次章以後の考察で提出することを意図している。

〔第3章〕

必須補語は、各々の述語によって要求される性質のものであることから、談話構造上、省くことができない構成要素となっている。一見、副次補語と思えるもののうちのいくつかは、ある種の述語にとっては必須補語と見なさなければならない場合がある。必須補語及び副次補語と認定するための妥当な基準と

しては、談話レベルにおいて母語話者の直感に依拠する 1 項目に加えて、文レベルにおける統語的な 3 項目が設定でき、必須補語と副次補語は、必須性・副次性に程度の差を有するため、いくつかの段階があるものとして捉えられる。

〔第 4 章〕

日本語における格助詞の交替現象が単一格助詞同士の交替と、単一格助詞と複合格助詞の交替の二つに大別できることを指摘した上で、前者については、16 種類のものがあることを明らかにし、その全体像を浮き彫りにした。また、第 3 章では、日本語における必須補語と副次補語について考察し、それらを認定するための基準を設けた。その基準の一つが、「意味的な格助詞の、統語的な格助詞との交替可能性」であったが、これは、本章で論述した格助詞の交替現象のうちの何種類かを活用した性質のものであると言える。

〔第 5 章〕

数量表現の型は、日本語では 5 種類が見出されるが、朝鮮語ではそのうちの 3 種類しか成立しない。朝鮮語における数量詞の遊離については、提唱された説の一つに「格助詞説」があるが、同一文中の同一の格助詞であっても、文法関係の範疇の違いによって文法性の違いが生ずることが判明し、これは「格助詞説」に対する反証となる。また、遊離した数量詞が文中どこまで移動可能であるのか、という数量詞遊離の範囲についても、文法関係と格助詞の階層性に従い、これまでに提案されてきた制約より一層一般化の得られた形式で記述・説明できる。

〔第 6 章〕

日本語における複合格助詞について、形態的側面では連体表現が 2 種類あることとその成立状況など、統語的側面では単一格助詞との交替現象及び動詞の結合価にかかわる様態など、意味的側面では動詞部分の意味の実質性に段階があることなどを明らかにした。また、動詞部分の意味の実質性の強弱といった意味的側面と、動詞部分の漢字使用の頻度、及び動詞部分の連体形の可能性といった形態的側面との間に密な相関関係がある。さらに、複合格助詞は、前に

来る名詞類などが持つ何らかの特性が弱くても、動詞部分の意味がその特性を補い、強化することによって、使用が可能となる機能を有している。

【第7章】

日本語と朝鮮語における複合格助詞について、特に次のことを明らかにした。形態的側面では、日本語よりも朝鮮語の方が、2種類ある連体表現のうち、動詞連体形によるものの成立を許す度合いが高い。統語的側面では、朝鮮語も日本語と同様に、いくつかの複合格助詞で表示された補語は常に副次補語となっているわけではなく、ある種の動詞にとっては必須補語を成り立たせている。意味的側面では、動詞部分の実質的な意味を保持した複合格助詞が、日本語よりも朝鮮語における方が多い。また、このことは、上記の形態的側面と大いに相関関係がある。

【第8章】

日本語における複合動詞について、特に次のことを明らかにした。形態的側面では、複合動詞を構成している前項に言語現象が生じない語彙的複合動詞と、その前項に言語現象が生じうる統語的複合動詞の2種類に大別できる。統語的側面では、複合動詞自体の格支配と、複合動詞を構成している前項・後項それぞれの格支配との間に見られるパターンが6種類あり、語彙的複合動詞における格支配は前項・後項の両方、前項のみ、後項のみのいずれかによってなされているが、統語的複合動詞においては前項のみによるものだけである。

【第9章】

日本語と朝鮮語の間における複合動詞のいくつかの相違点は、次の動詞連用形に関する両言語間の違いに由来する。第14章で詳述するように、朝鮮語における動詞連用形は、基本的には節・文レベルで用いられるのに対して、日本語における動詞連用形は、節・文レベルのみならず、語レベルにまで入り込んで用いられる。また、動詞連用形の後の区切りは、日本語は朝鮮語ほど大きくなく、日本語においてより大きな区切りを入れた形式が「動詞連用形＋接続語尾『て』＋動詞」であり、これが区切りの度合いとしては朝鮮語における統語

的な性格を有する「動詞連用形＋動詞」と同等になっている。

【第 10 章】

膠着言語は形態上、同様に見えても、要素と要素が緊密に結び付いている言語もあれば、その結び付きが緩い言語もある。こういったことが影響し、文という大きな単位は一つしか考えられない単一的統語構造をなしている言語もあれば、文という大きな単位がもう一つ盛り込まれた複合的統語構造になっている言語もある。前者のような言語が朝鮮語であり、後者のような言語が日本語であり、その間に位置づけられる言語がトルコ語などである。さらに、そういったことを顕著に反映している現象が使役構文であり、複合動詞構文である。

【第 11 章】

日本語と朝鮮語における「複合格助詞」「複合動詞」「『動詞連用形＋テイク／動詞連用形＋가다 <kata> (行く)』構文と『動詞連用形＋テクル／動詞連用形＋오다 <ota> (来る)』構文」などの諸言語現象について考察すると、日本語と朝鮮語の相違を引き起こしている根本的な要因として、「文法化の進度の違い」を導き出すことができる。その「文法化の進度の違い」というのは、日本語では諸言語現象において文法化が比較的生じているのに対して、朝鮮語では諸言語現象において文法化が比較的生じていない、というものである。

【第 12 章】

日本語と朝鮮語における「接辞を用いた使役構文」「複合動詞構文」「『～中(に)／～중(에) <cwung(-ey)>』『～後(に)／～후(에) <hwu(-ey)>』などを用いた構文」などの諸言語現象について考察すると、日本語と朝鮮語の相違を引き起こしている根本的な要因として、「形態・統語的仕組みの違い」を導き出すことができる。その「形態・統語的仕組みの違い」というのは、日本語では語と節・文が重なって融合している性質のものが存在する仕組みになっているのに対して、朝鮮語では基本的には語と節・文の地位を区別する仕組みになっている、というものである。

〔第 13 章〕

日本語における形容動詞と朝鮮語における形容詞の様態は、第 11 章で示された両言語間における「文法化の進度の違い」と合致している。また、日本語では、動作・行為や状態・性質を叙述するのに名詞述語を用いて表現することができる。それに対して、朝鮮語では、こういったことは困難であり、動詞あるいは形容詞を述語とした表現形式をとる必要がある。さらに、この事実は、第 12 章で示した「形態・統語的仕組みの違い」という根本的な要因と強く結び付いており、これに由来したものである。

〔第 14 章〕

動詞連用形は、朝鮮語に比べて日本語の方が広範囲にわたって利用される。また、朝鮮語における動詞連用形は、基本的には節・文レベルで用いられるのに対して、日本語における動詞連用形は、節・文レベルのみならず、語レベルにまで入り込んで用いられる。こういったことは、第 12 章で両言語間の相違を引き起こしている根本的な要因として導き出された「形態・統語的仕組みの違い」が反映された結果であり、文法体系における動詞連用形の位置づけが両言語間で異なっている。

〔第 15 章〕

本論文における考察で得られた成果をまとめて記すと、次のとおりである。

- (A) 日本語と朝鮮語の間における相違を引き起こしている根本的な要因として、「文法化の進度の違い」（詳細は上記〔第 11 章〕参照）を導き出すことができる。
- (B) 両言語間の相違を引き起こしている根本的な要因として、「形態・統語的仕組みの違い」（詳細は上記〔第 12 章〕参照）を導き出すことができる。
- (C) 両言語間における文法化の進度の違いは、さらに根本的な要因である形態・統語的仕組みの違いと強く結び付いており、これに起因した結果のものがある。
- (D) 「文法化の進度の違い」及び「形態・統語的仕組みの違い」が根本にあ

るため、諸言語現象で両言語間の相違となって現れる。

(E) 従って、「文法化」さらには「形態・統語的仕組み」に着目することによって、諸言語現象における両言語間の相違を統一的に捉え、適切に記述・説明することが可能となる。

〈付録〉〔第 16 章〕

日本語における、過去を表す形式「た」、複文の接続形式、「『動詞連用形+テイク』構文と『動詞連用形+テクル』構文」などを取り上げ、それらに対応する朝鮮語との類似点と相違点を指摘した。また、朝鮮語が他のどの言語よりも日本語と類似している、ということの中で、日本語と朝鮮語の間に見出される相違点は、朝鮮語を母語とする学習者に対する日本語教育だけでなく、学習者の母語を特定しない日本語教育全般において、最も後回しにしてよい教授項目の一つの基準になる。

〈付録〉〔第 17 章〕

朝鮮語における固有語動詞の受身文について、「이<i>」形は形態上、派生を経していない純粋な他動詞の場合に用いられ、「지다<cita>」形はそういった他動詞であって対応する「이<i>」形を持たない場合と、自動詞からの派生を経た他動詞の場合に用いられる。また、この「이<i>」形か「지다<cita>」形かといった形態上の相違が、3 項動詞能動文から受身文への転換における制約、動作主のマーカ、主格補語の意味特性、アスペクトといった統語的且つ意味的な側面に影響を及ぼしており、両者間には相関関係がある。

〈付録〉〔第 18 章〕

朝鮮語における漢語動詞の受身文は、受身の体系内に接尾辞「되다<toyta>」だけではなく、接尾辞「받다<patta>」「당하다<tanghata>」が用いられた文も認めるべきである。また、接尾辞「되다<toyta>」「받다<patta>」「당하다<tanghata>」が用いられた受身文はそれぞれ中立・受益・被害を含意する性質のものであり、そのような意味的な特徴が主語の制約といった別の意味的な側面、さらには動作主のマーカやアスペクトといった統語的な側面にも反映される。

〈資料〉

巻末には、本論文の内容にかかわる「参考文献」の他に、〈資料〉として次のものを掲載している。

日朝対照研究関係 主要参考文献一覧（1993年以前）

日朝対照研究関係 主要参考文献一覧（1994年以後）

日朝対照研究関係 主要研究教育機関別 博士学位論文一覧